

認め合う心を育てる道徳学習指導 ～思いが見える化する対話活動を通して～

要約

現在、自分に自信がある子どもが国際的に見て少ないことや、将来の生活に対して無気力であったり不安を感じたりする子どもの増加が指摘されるなど、子どもたちの心の状況に関わる課題は少なくない。今回、「特別の教科道徳」として答えが一つではない道徳的な課題を一人一人の児童が自分自身の問題と捉え、向き合う「考える道徳」、「議論する道徳」へと転換が図られる。自分と異なる立場や考え方を理解して、望ましい人間関係を構築できるようにすることが重視されている。本学級の子どもたちは、素直で明るい子どもが多い一方で、自分や友達のよさを認められない子ども、行動や言動に自信をもてない子どもや、自己中心的な考えで、周りの友達のことを考えずに行動をしてしまう傾向の強い子どももいる。そこで、他者と思い・考えを交流する対話活動を通して、認め合う心を育てることに意義があると考え、次のような具体的方策のもと、研究に取り組んだ。

(1) 学習過程の工夫

学習過程	工夫
つかむ	事前アンケートの結果をもとに、課題の内容を把握する〈自己内対話〉
つくる	<ol style="list-style-type: none"> 1 発問に対する自分の思いを、図や言葉で表す【見える化Ⅰ】 2 ペアで交換し、えんぴつトークをする【見える化Ⅱ】〈他者対話〉 3 「1.2」の活動を通して、再形成した思いを図や言葉で表す 【再形成】…補完・共創・独立したもの
ふかめる	観点を与えて、認め合う心をふくらませながら「今日の学習で」を書き、価値の自覚を図る〈自己内対話〉

(2) 対話活動の工夫

ペア活動で話す視点や理由づけを明確にするために、思いの見える化を行う。

実践の結果、以下のような成果（○）と課題（●）を得た。

- えんぴつトークをし、「見える化線」をひきあうことで、相手の思いと自分の思いを比べながら交流でき、自分と友達の思いは異なってもよいということを実感できた。
- 思いの再形成をすることで、子どもたちが、ペア交流を通して自分の思いが補完・強化されることを実感できた。
- 学習過程に、自己内対話と他者対話を位置づけることは、道徳的価値の把握や道徳的価値に迫る上で有効であった。
- 認め合う心を育てながら道徳的価値の自覚を促すためには、見える化線だけでなく、学習ノートにコメントを入れ合うなど、さらなる工夫が必要である。

キーワード 認め合う心 思いの見える化（見える化線、えんぴつトーク） 対話活動

1 主題設定の理由

(1) 道徳教育のねらい・「学習指導要領解説特別の教科道徳」から

道徳教育においては、人間尊重の精神と生命に対する畏敬の念を前提に、人が互いに尊重し協働して社会を形成していく上で共通に求められるルールやマナーを学び、規範意識などを育むとともに、人としてよりよく生きる上で大切なものとは何か、自分はどのように生きるべきかなどについて考えを深め、自らの生き方を育んでいくことが求められる。

しかし現在、自分に自信がある子どもが国際的に見て少ないことや、将来の生活に対して無気力であったり不安を感じたりする子どもの増加が指摘されるなど、子どもたちの心の状況に関わる課題は少なくない。

今回、「特別の教科道徳」として学習指導要領の一部が改正された。この改正では、発達の段階に応じ、答えが一つではない道徳的な課題を一人一人の児童が自分自身の問題と捉え、向き合う「考える道徳」、「議論する道徳」へと転換が図られる。さらに、今後グローバル化が進展する中で、様々な文化や価値観を背景とする人々と相互に尊重し合いながら生きることや、科学技術の発展や社会・経済の変化の中で、人間の幸福と社会の発展の調和的な実現を図ることが一層重要な課題となる。こうした課題に対応していくためには、社会を構成する主体である一人一人が、高い倫理観をもち、人としての生き方や社会の在り方について、時に対立がある場合を含めて、多様な価値観の存在を認識しつつ、自ら感じ、考え、他者と対話し協働しながら、よりよい方向を目指す資質・能力を備えることがこれまで以上に重要である。また、第3学年及び第4学年のB 主として人との関わりに関することにおいて、自分と異なる立場や考え方を理解して、望ましい人間関係を構築できるようにすることを重視して、「自分の考えや意見を相手に伝えるとともに、相手のことを理解し、自分と異なる意見も大切にすること」と内容項目が加えられている。

このことから、他者と思い・考えを交流する対話活動を通して、認め合う心を育てることに意義があると考え、本主題を設定した。

(2) 子どもの実態から

本学級の子どもたちは、素直で明るい子どもが多い一方で、自分や友達のよさを認められない子ども、行動や言動に自信をもてない子どもも多くみられる。また、自分が周りからどう見られているかを気にしている様子もみられる。その背景として、自己中心的な考えで、周りの友達のことを考えずに行動をしてしまう傾向の強さが挙げられる。また、集団の規則や遊びのきまりの意義を理解しきれず、トラブルにつながることも多くある。

そこで、安心して自己有用感を味わったり、正義を通したりできる教室の雰囲気づくりに努めながら、この子どもたちに、自分を大事にすることの尊さ、人を信じることの喜び、人とつながることのすばらしさを味わわせたいと強く感じている。また、中学年は身体が丈夫になり、運動能力や知的な能力も大きく発達し、運動や勉強に関して「自分はできる」という感覚が育つ時期である。このような時期に、他者（友達）から認められる、受容される経験を多く積ませたい。

(3) 指導上の課題から

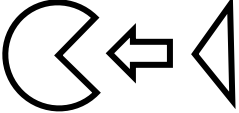
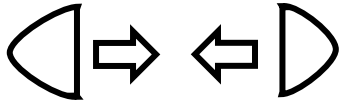

日頃の道徳の時間をふりかえてみると、私自身が学習指導を行う中で、特に「対話活動」に課題があると感じる。互いの考えをペアで交流したり、思いを整理して板書したりはしているものの、一方的な意見の出し合いにとどまっていた。ペア交流を通して、自分の考えに深まりが出たり、新しい考えを作り出したりする経験を積ませることができていなかった。その原因として、ペア活動の際に、自分の考えと同じところと異なるところを感じながら聞く「交流の視点」が明確に与えられなかったことや、自分と異なる考えに対して、自己をふりかえりながら考えを深める活動を設定しきれていなかったことが挙げられる。そのため、心の学習であるはずの道徳の時間においても子どもたちは、対話活動を通して、自分の考えを認めてもらえるのか、相手は自分の考えをどう思っているのかが見えづらく、不安なまま過ごしてしまっていたのではないかと考える。このことから、「思いが見える化」する対話活動を通して、認め合う心を育てるため、本主題を設定した。

2 主題の意味

(1) 主題「認め合う心を育てる道徳学習指導」について

① 「認め合う心」とは

友だちの思いを、取り入れたり、生かしたり、否定せず強化することである。
本研究では、補完・共創・独立とよび、下記のように定義する。

補完	共創	独立
自分の中に存在しない他者の思いを自分の中に取り入れ、完成させることである。 	まだ完成していない考えを合わせて、新しい考えを作り上げることである。 	自分と異なる他者の考えを否定せず、お互いが自分の考えを強化することである。 

② 「認め合う心を育てる」とは

道徳の時間において、友だちと思いを交流する活動を通して、道徳的価値を自分のこととして感じたり考えたりすることができるようにすることである。

(2) 副主題「思いが見える化する対話活動」とは

① 「思い」とは

子どもたちが道徳の時間に、自分の心に問いかけ、それまでの経験や培ってきた道徳性に基づいて考える中で生まれる思考である。

道徳の時間の中で、道徳的価値に向かっていく過程で生まれるものを指す。また、対話活動を通して生まれた、友達の考えに対する自分の考えも、思いに含まれる。

② 「思いが見える化する」とは

音声や心内語では見えない思いを、図や言葉で表すことである。

図や言葉で表すことによって、自分の思いを整理したり、見返したり、書き加えたりすることができ、友だちに自分の思いを伝えたり、友だちの思いを知ることができる。

③「思いが見える化する対話活動」とは

自分の思いを、図や言葉に表し、見える化したものを自分や友だちと共有し合うことである。

対話活動には、心の中で自分と対話し、考えが深まったり、新しい考えに気付いたりするなど、自己変革を生み出す「自己内対話」と、互いに意見を出し合い、一人では到達し得ない何かを作りだしたり、多様な価値観に気づき、自分の道徳的価値観を深めたりする「他者対話」がある。この対話活動を通して、取り入れて完成させる「補完」、思いを合わせてつくる「共創」、思いを強化し合う「独立」がみられる。

3 研究の目標

子どもたちの認め合う心を育てるために、思いが見える化した対話活動を具体化する道徳学習指導のあり方について究明する。

4 研究の仮説

道徳の時間において、下記のように思いが見える化することを通して、対話活動を行えば、子どもの認め合う心を育てることができるであろう。

5 研究の具体的構想

(1) 学習過程の工夫

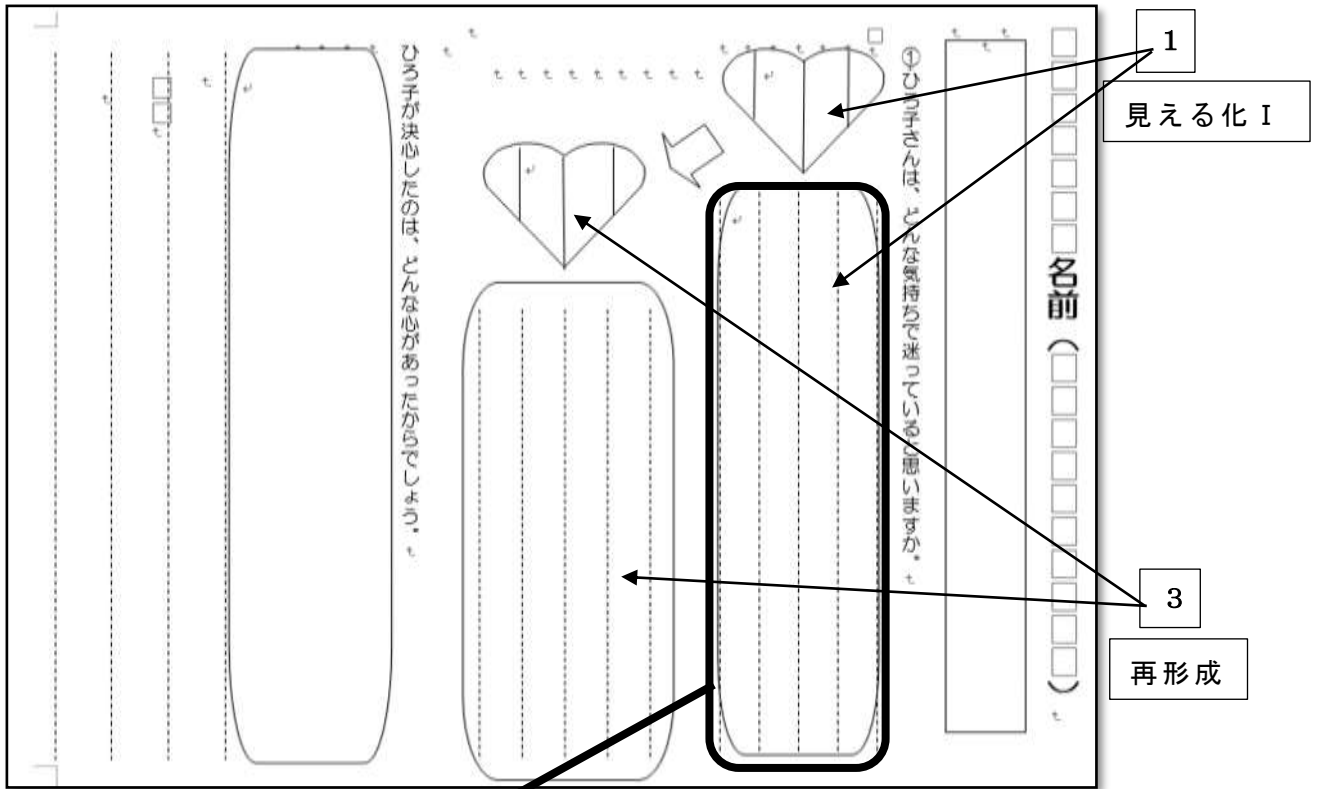
以下のように、自己内対話・他者対話・見える化Ⅰ・Ⅱを学習に位置づけていく。

学習過程	工夫
つかむ	事前アンケートの結果をもとに、課題の内容を把握する〈自己内対話〉
つくる	①発問に対する自分の思いを、図や言葉で表す【見える化Ⅰ】 ②ペアで交換し、えんぴつトークをする【見える化Ⅱ】〈他者対話〉 ③「1.2」の活動を通して、再形成した思いを図や言葉で表す【再形成】…補完・共創・独立したもの
ふかめる	観点を与えて、認め合う心をふくらませながら「今日の学習で」を書き、価値の自覚を図る〈自己内対話〉

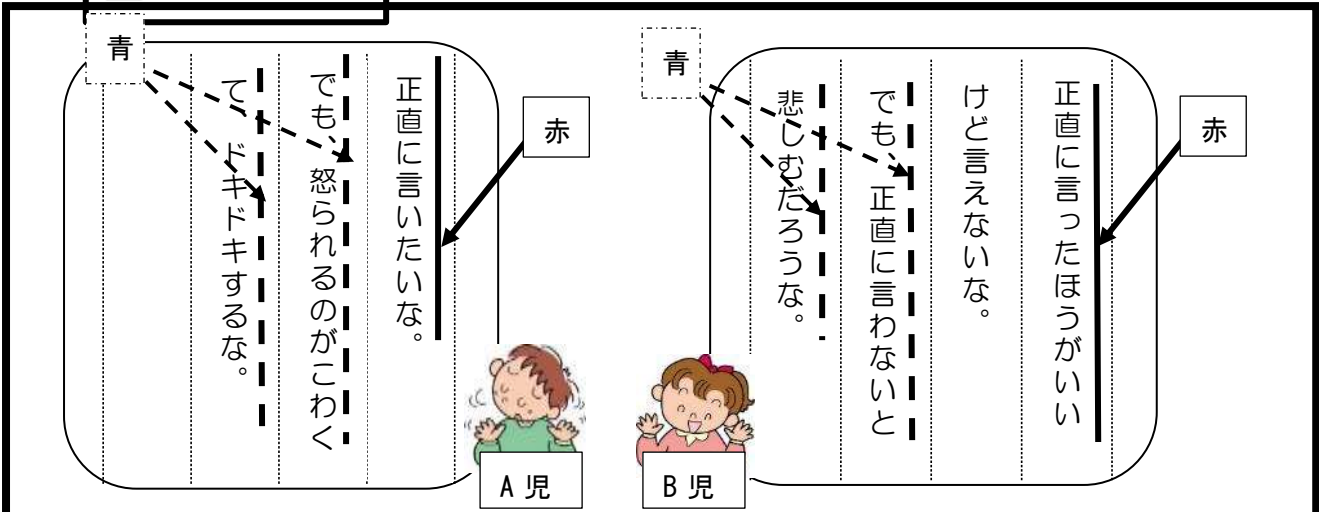
(2) 対話活動の工夫

ペア活動で話す視点や理由づけを明確にするために、思いの見える化を行う。

- ① 見える化Ⅰ【発問に対する思いを図や言葉で表す】
- ② 見える化Ⅱ【ペアでえんぴつトークをする】
 - ・学習ノートを交換し、赤青えんぴつで「見える化線」を引き合う。
 - ・自分と考えが似ているところには赤の「見える化線」
 - ・自分にはなかったなあ・いいなあと思うところには青の「見える化線」を引く。



2 見える化 II

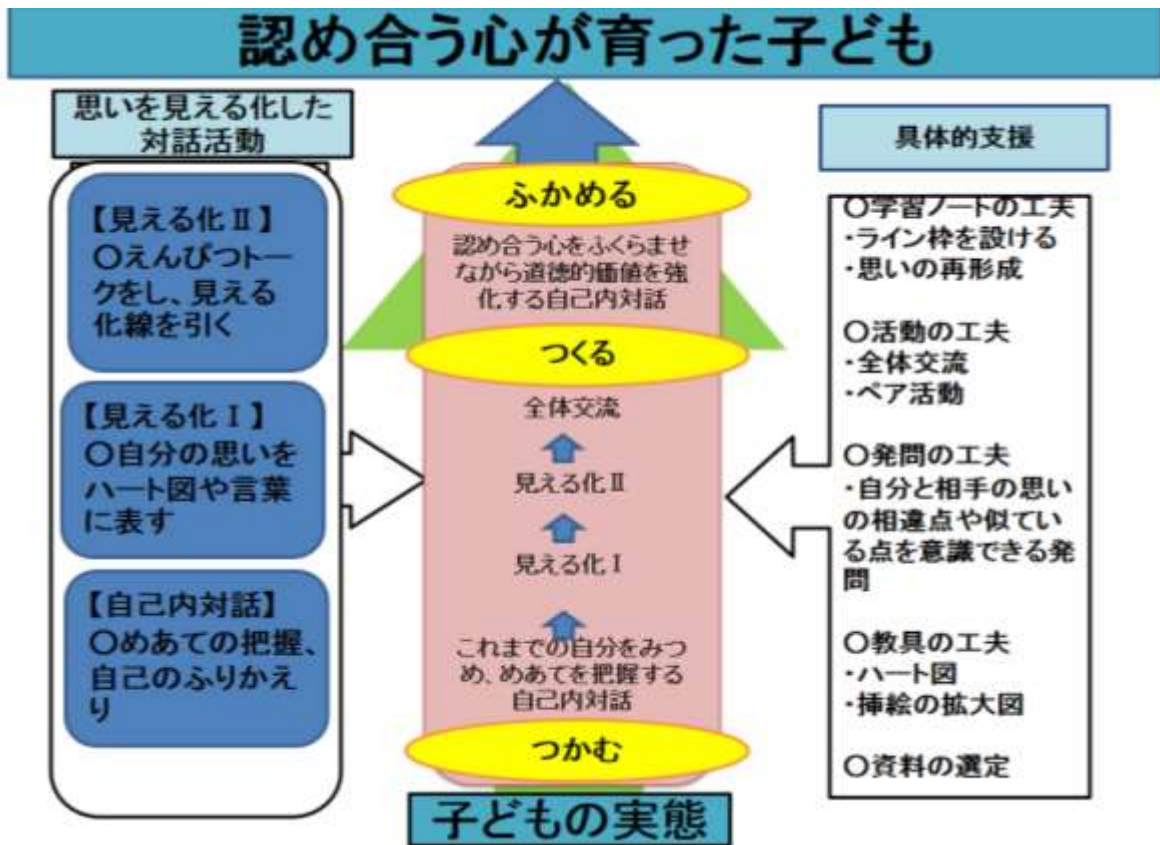


例：正直誠実・明朗を徳目とした場合
 主人公の気持ちを考え、言葉にした後に交換し、えんぴつトークをした。

A 児も B 児も、「正直に言ったほうがいいよな…」という友だちの思いと自分の思いがそれぞれ似ていると感じている。この場合は、赤の「見える化線」をひく。

しかし、後半部分の、「怒られるのが怖い」という思いをもっている A 児と、「正直に言わないと相手を悲しませてしまう」と思っている B 児の思いは異なるため、自分にはない、この考えもいいなあと感じていることを表す青の「見える化線」をひく。

6 研究の構想図

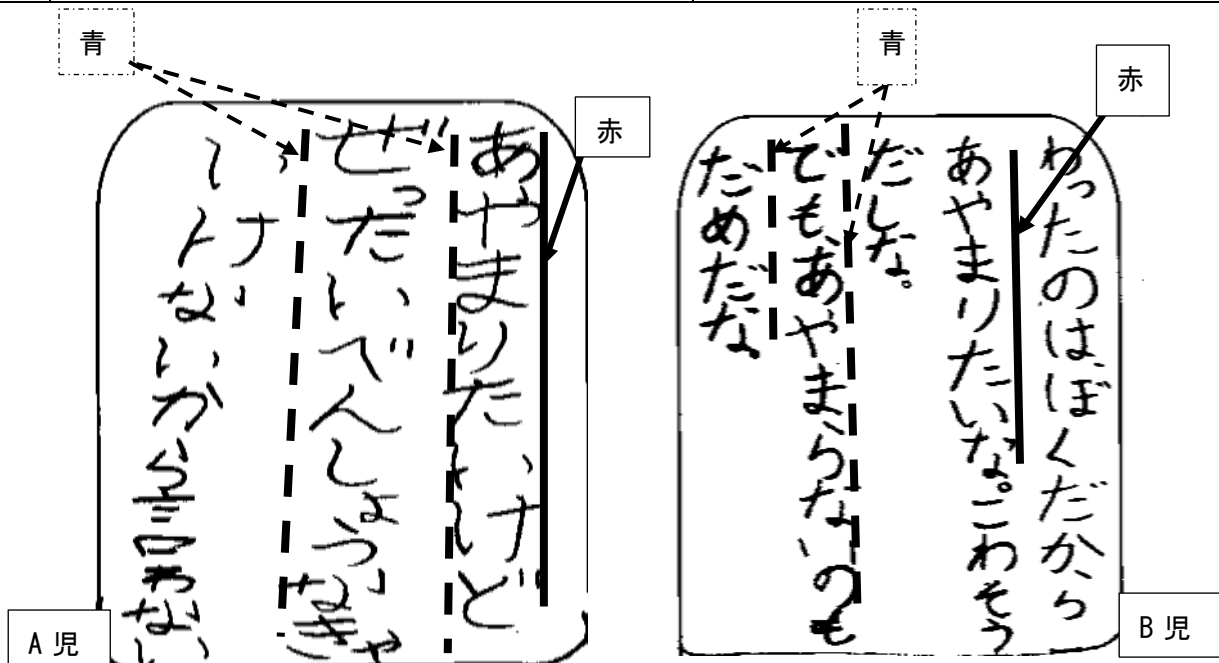


7 研究の実際と考察

- (1) 資料名「まどガラスと魚」(文溪堂)「正直な心で」1-(4) 正直誠実・明朗
主人公がよその家の窓ガラスを割ってしまい、その場から逃げたものの、葛藤の末、正直に謝りに行くという内容である。正直で誠実に行動することは、相手のみならず、自分もすがすがしい気持ちになれることを気付かせることができる資料である。
- (2) ねらい 進一郎の葛藤しながらも正直に謝る姿を通して、過ちを素直に認め正直に行動することの大切さに気づき、正直に明るい心で生活しようとする心情を育てる。
- (3) 展開【実践1】

段階	学習活動	思いに見える化する対話活動
つかむ	<p>1 事前アンケートの結果から、自分の体験を想起しながらめあてをつかんだ。</p> <p>事前アンケート</p> <ul style="list-style-type: none"> ○しっばいしてしまったこと ○正直に言えたか、言えなかったか ○その時の気持ち 	<p>【自己内対話】</p> <p>事前アンケートでは、失敗したことや、正直に言えなかった体験を想起し、その時の気持ちを書いた。</p> <p>本時では数人の体験談を例に出すことで、自分の経験と比べ、共感しながらめあてをつかんだ。</p>
	しっばいしたときに、どんな心が大切か考えよう	

つくる	<p>2 資料「窓ガラスと魚」を読み、進一郎の気持ちの変化について話し合った。</p> <p>(1) 窓ガラスを割って、夢中で逃げているときの進一郎の気持ちを出し合った。</p> <p>(2) 何度も窓を見に行った進一郎の気持ちを考えた。</p> <p>③「見える化線」をもとに、全体で交流した。</p>	<p>【見える化Ⅰ】</p> <p>進一郎の気持ちを考え、謝るか、だまっておくかをハート図に表し、気持ちを考え、自分の思いを言葉に表した。</p> <p>【見える化Ⅱ】</p> <p>えんぴつトークをした。</p>
-----	--	---



【資料① えんぴつトークをし、思いに見える化した学習ノート】

【つくる段階の考察】

資料①のように、A児B児のペアは「あやまりたい」という思いに共感し合い、互いに赤の「見える化線」を引いている。しかし、A児の「べんしょうしなくてはいけないから言わない」という思いと、B児の「あやまらないのもダメだな」という思いは、お互いの中に存在しなかったものである。よって、青の「見える化線」を引き合っている。また、交換した学習ノートを見て、「へえ～なるほど」や、「この考え、Aさんらしいね」とつぶやく様子もみられた。このことから、「見える化線」を引き合うえんぴつトークを通して、友だちの思いと自分の思いを比べながら交流することができたと考える。また、多くの子どもたちがペア交流後の全体交流で積極的に発表し、多様な考えを出し合うことができた。このことは、えんぴつトークをすることで、自分の思いが友だちに認められたという実感を得たうえで積極的に発表できたことや、自分と友だちの思いは違っていいという実感を得ることができたためではないかと考える。

しかし、ペア交流や全体交流を通して再形成された自分の思いを表現する場面がなかったため、学習ノートの工夫が必要であったと考える。

段階	学習活動	思いを見える化する対話活動
ふかめる	3 本時をふりかえり、「今日の学習で」を書いた 観点を与えて、認め合う心をふくらませながら「今日の学習で」を書き、価値の自覚を図る	【自己内対話】 これまでの自分をふりかえり、思いを表現することで道徳的価値の自覚を図る
	正直に、すぐにあやまる心が大切	

【実践1】 ○成果と●課題

- ペア交流の前にえんぴつトークをして、「見える化線」を引き合うことは、相手の思いと自分の思いを比べながら交流するうえで有効であった。
- えんぴつトークをすることで、自信をもって自分の思いを発表する様子がみられた。
- ペア交流やえんぴつトークを通して、再形成された思いを表現する機会がなかったため、友達の思いが自分にどのように影響したかが見えにくかった。

【実践2】

(1) **資料名**「絵はがきと切手」「友だちのことを考えて」2-(3) 信頼・友情

本資料は、主人公のひろ子が、転校していった仲良しの友だちの正子からきれいな絵はがきを受け取り、返事を書こうとする話である。しかし、その絵はがきは普通より大きめだったため、受け取った兄が不足料金を払わなければならなかった。ひろ子は返事を書こうとしたが、迷うひろ子はしばらく考えた後、料金不足のことを書き足そうと決心するというものである。

(2) **ねらい** ひろこの気持ちを考えることを通して、友達のことを考えて互いに理解しようとする心情を育む。

(3) **展開**

段階	学習活動	思いを見える化する対話活動
つかむ	1 「友だち」とは、どのようなものかを問いかけ、めあてをつかんだ。 本当の友だちといえるには、どんな心が大切か考えよう。	【自己内対話】 自分が思う「友だち」とはどういうものかを考える。

つくる	2 資料「絵はがきと切手」を読み、ひろ子の気持ちについて話し合った。 (1) 正子さんから絵はがきを受け取ったとき <ul style="list-style-type: none"> ・ 転校していった仲良しの正子さんからの絵はがき ・ 大きな絵はがき（料金不足） (2) 返事を書こうとしたときの迷い <ul style="list-style-type: none"> ・ 料金不足を教える ・ 料金不足を教えず、お礼だけ書く 	【見える化Ⅰ】 ひろ子の気持ちを考え、教えるか、教えないかをハート図に表した。その時のひろ子の気持ちを考え、自分の思いを言葉に表した。
		【見える化Ⅱ】 思いを書いた学習ノートをペアで交換し、えんぴつトークをした。

学習ノートの工夫

書いてもらった線や交流をもとに、自分の思いをもう一度ハート図に書き、その色にした理由を書くスペースを設ける。



【写真① えんぴつトークをする様子】



【資料② 思いを再形成した学習ノート】

【つくる段階の考察】

実践1の課題をもとに、思いの再形成をさせることで、「〇〇さんの話を聞いてやっぱりそうだと思ったのでこの色にしました」といったように、自分の思いを「強化」する姿が見られたり、資料②のように、「〇〇さんが言ったように、きちんと教えたほうが正子さんのためになるから」とハート図の色の割合が変わるなどの「補完」する姿が見られたりした。

段階	学習活動	思いに見える化する対話活動
ふかめる	<p>3 本時をふりかえり、「今日の学習で」を書いた</p> <p>観点を与えて、認め合う心をふくらませながら「今日の学習で」を書き、価値の自覚を図る〈自己内対話〉</p>	<p>【自己内対話】</p> <p>これまでの自分をふりかえり、思いを表現することで道徳的価値の自覚を図る。</p>
<p>行動する前に相手のことをよく考える心が大切</p>		

【実践2】 ○成果 ●課題

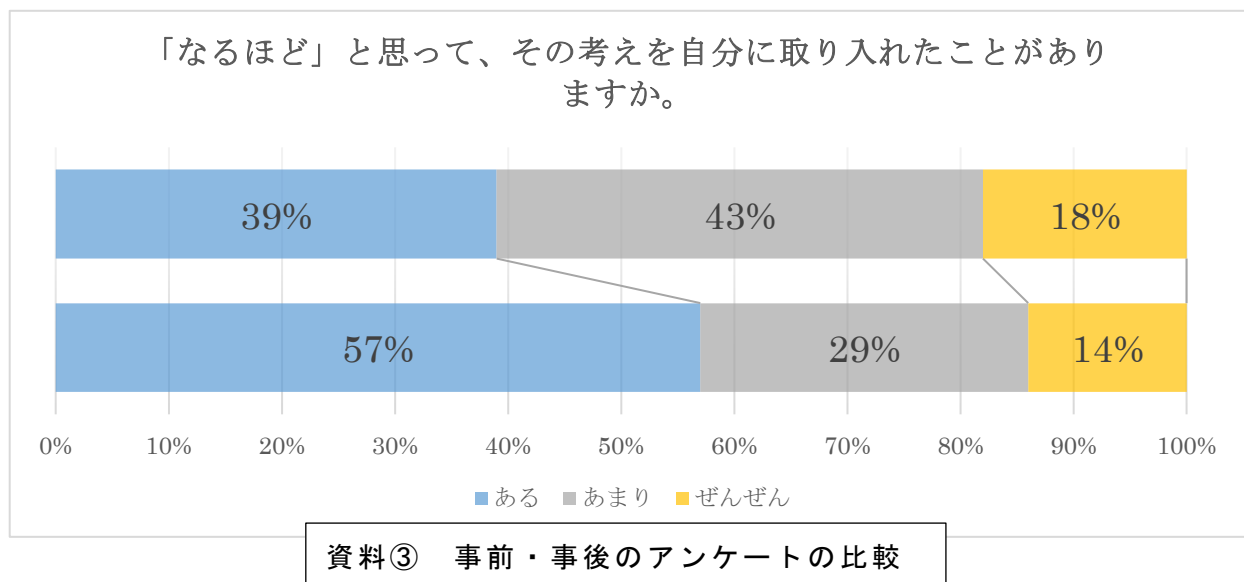
自分の思いに見える化して交流することで、多様な考えを出し合うことができた。また、どの考えにも共通しているのは「友だちのことをよく考えること」という思いを見つけることもできた。これは、「信頼・友情」という道徳的価値に迫るうえで有効であったと考える。

- 思いの再形成をすることで、子どもたちが、ペア交流を通して自分の思いが補完・強化されることを実感できた。
- 思いの再形成をすることは、考えを深め合って道徳的価値に迫るうえで有効であった。

8 研究の成果と課題

(1) 全体考察

実践を終えて、アンケートを実施したところ、当初のアンケートと比べると資料③のような変化が見られた。当初のアンケートでは、「友達の考えを自分に取り入れたことがある」と答えたのは全体の39%であったが、実践後のアンケートでは57%に上昇した。このことは、実践1で行った「見える化Ⅱ」に加え、実践2においてさらに思いを再形成することを通して認め合う心が高まったためであると考えられる。また、実践後に子どもたちの会話の中で「〇〇くんの意見と〇〇さんの意見を合わせればうまくいきそうだからやってみよう」など、お互いの考えをよく聞いて、それぞれを認めたいうえで取り入れようとする姿が見える場面があった。このことは、認め合う心の育ちではないかと考える。



(2) 研究の成果と課題

- えんぴつトークをし、「見える化線」を引き合うことで、相手の思いと自分の思いを比べながら交流でき、自分と友だちの思いは異なってもよいということを実感できた。
- 思いの再形成をすることで、子どもたちが、ペア交流を通して自分の思いが補完・強化されることを実感できた。
- 学習過程に、自己内対話と他者対話を位置づけることは、道徳的価値の把握や道徳的価値に迫るうえで有効であった。
- 認め合う心を育てながら道徳的価値の自覚を促すためには、見える化線だけでなく、学習ノートにコメントを入れ合うなど、さらなる工夫が必要である。

〈参考文献〉

- ・文部科学省 2008年 「小学校学習指導要領解説 道徳編」 東洋館出版
- ・文部科学省 2015年 「小学校学習指導要領解説 特別の教科道徳編」
- ・初等教育資料 2015年 「特別の教科道徳の実践に向けて」 東洋館出版
- ・坂本 哲彦 2014年 「道徳授業のユニバーサルデザイン」 東洋館出版
- ・諸富祥彦 2011年 『ほんものの「自己肯定感」を育てる道徳授業』 明治図書